

# 湯築城だより 3

YUZUKIJO NEWS Vol.3

## 特集！みえはじめた城下のすがた

### ●はじめに●●●●●

湯築城は、14世紀前半に築城され、16世紀末ごろに廃城になったと考えられています。当初は丘陵を利用した山城であったと推定され、現在残る二重の堀と土塁に囲まれた平山城としての姿は、16世紀前半に整えられたことが発掘調査と文献から裏付けられています。湯築城の築城や変化は周辺にどのような影響を与えたのでしょうか。

戦国時代に日本を訪れた宣教師ルイス・フロイス（1563（永禄6）年来日）が、布教のようすを記した『日本史』には、「道後の市」と呼ばれ大変栄えていた湯築城周辺の町が登場します。

湯築城の西に隣接する道後町遺跡の発掘調査では、大きな石を並べたり組んだりした遺構や、様々な陶磁器など、堀の外側にもかかわらず湯築城内と似た遺構・遺物が発見されました。

城の周辺で行われた中世遺跡の調査成果を紹介しながら、湯築城下のすがたを探っていきましょう。



道後町遺跡の遺構と遺物

左：30区 S X 01 検出状況

上：S X 01 出土ベトナム産白磁碗

## 湯築城周辺の中世遺跡

湯築城のある道後地域は、松山平野の北東部に位置します。中世には、湯築城東側に石手寺、義安寺、北側に宝巖寺などの寺院が集中し、周囲には門前町や街道が発達していたと考えられます。

はじめに、発掘調査が行われてわかった湯築城西側に広がる農村集落のようすを見ていきましょう。

### 道後の中世遺跡調査のさきがけ

#### 道後今市遺跡1～5次調査

道後今市遺跡は、湯築城の西側約1km、現在の県民文化会館の周辺に広がる遺跡で、これまで13回の調査が行われています。

1～5次調査では、はじめて道後地域の中世遺跡が調査され、掘立柱の建物や柵のあと、溝などの遺構と、12世紀末～16世紀の遺物が確認されました。15世紀の備前焼甕を棺とした墓も見つかりました。

### 中心的集落の様相

#### 道後今市遺跡10次調査

10次調査の地点は、道後今市遺跡の中でも安定した小高い土地に位置しています。

何棟もの掘立柱の建物や、溝、柵のあとなどが見つかり、12世紀後半～15世紀を中心に、人々が長期にわたり生活していたようすがうかがえます。また、青磁や白磁などの貿易陶磁器のほか、備前焼（岡山県産）、常滑焼（愛知県産）、赤間硯（山口県産）などを入手して使っており、比較的豊かな暮らしぶりが想像されます。

10次調査地点は、湯築城の外堀が掘られる以前、湯築城西側に展開していた中心的な農村集落のひとつであったといえます。



10次調査で見つかった建物や柵などのあと



湯築城周辺の遺跡地図

(国土地理院発行2万5千分の1の地形図「松山北部」を利用)

### 集落周辺の耕作地

#### 道後今市遺跡9・13次調査

9次調査・13次調査では、集落の周辺に広がる耕作地部分が調査されました。

9次調査地点は、10世紀以降14世紀ごろまで水田もしくは畑地でしたが、たびたび洪水が起きて、耕作面が砂で埋まるような状態であったことが確認されました。調査では、洪水による砂で埋まった人と牛の足跡も見つかりました。

13次調査地点は、13世紀中ごろまで水田として、その後13世紀後半から16世紀初めごろまでは、建物跡などが見つかっており集落の一部であったようですが、16世紀前半の湯築城の外堀が掘られたころには、畑地となっていたようです。



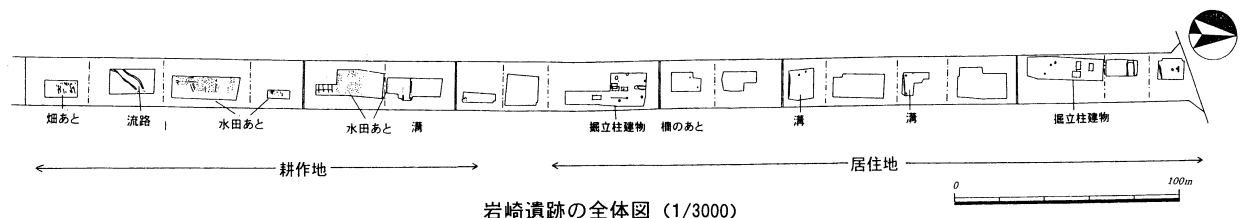
9次調査で見つかった耕作地と溝

### 湯築城近辺の小規模集落の展開

#### 岩崎遺跡

岩崎遺跡は、湯築城から南0.5～1kmに南北に広がる遺跡で、地形が北から南にかけて低くなっています。13～15世紀には、石手川に近い南側の低地部には水田が広がっていました。それより北側には、小規模な掘立柱の建物が数棟点々と建っていたようです。

道後今市遺跡よりも規模の小さい村落が、湯築城の南西側にも展開していたことがわかりました。



岩崎遺跡の全体図 (1/3000)

(松山市教育委員会他『岩崎遺跡』1999を利用)

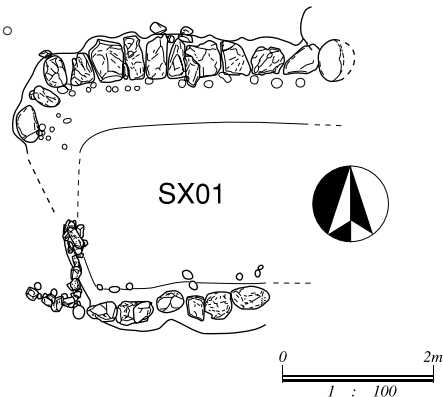


## ●道後町遺跡の調査成果●●●●●

道後町遺跡は、湯築城のすぐ西側に位置し、県道の拡幅にもなって発掘調査されました。遺構や遺物の状況から、湯築城の城下町の可能性がります。

**護岸状の遺構と出土遺物** 29・30区では、幅20～50cmくらいの石を東西方向に向かい合って並べた遺構（SX01）が発見されました。西端は弧を描いてつながっていて、石列の内側は、溝のようなくぼみになっています。石列沿いには杭の跡が見つかり、護岸施設の可能性があります。

この遺構からは、備前焼の甕やすり鉢、天目茶碗、輸入陶磁器など天正年間（1573～1592年）ごろの多くの遺物が出土しました。また、ベトナム産白磁碗など、湯築城内では出土していないものも確認されています。



▲ 護岸状の遺構平面図

護岸状の遺構(SX01) から出土した遺物

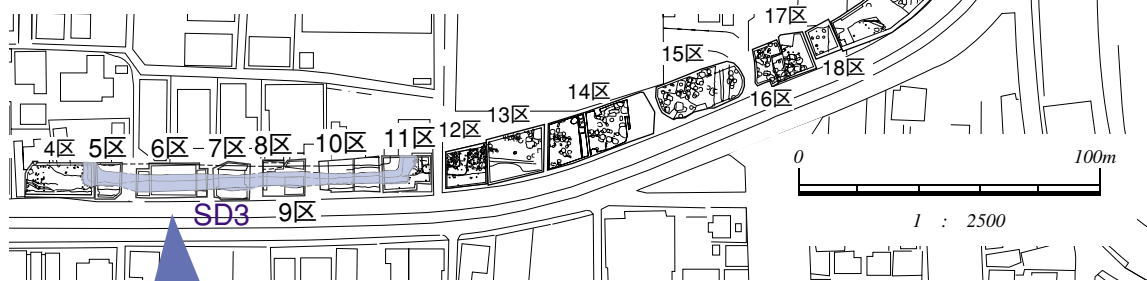


◀ 四角い穴の中に石を積んだ遺構 (SK31)

**地割り・石組み** 20区では、石列をとまう溝が見つかりました。溝は東西方向に掘られていて、規格性のある町並みが造られたことがわかります。

22区で見つかったSK31は、四角い穴の中に石を積んで造られています。同じような遺構は中世博多遺跡群や一乗谷朝倉氏遺跡など戦国時代の大きな町の遺跡から多く発見されています。

21区を中心に甲冑の一部が出土し、武士たちの居住や活動が予測できます。このことから湯築城と深くかかわる町であると推定できます。



**一町四方の方形区画の出現** SD3は、一辺109m（一町）にわたって検出され、一町四方の方形の堀になる可能性が高いとみられています。身分の高い武士の居館などが想定され、論議を呼んでいます。時期は15世紀と考えられます。

出土した様々な輸入陶磁器や生活用具が町の繁栄を物語っています。

鉄滓やフィゴの羽口が出土し、鍛冶師によって鉄製品の製作が行われていたと推定できます。鋳物師の道具であるルツボも出土しています。

## ●湯築城下のすがた●●●●●

これまでにみた中世遺跡の発掘調査から、「みえはじめた湯築城下のすがた」をまとめてみましょう。

道後今市遺跡や岩崎遺跡で見たように、12世紀から15世紀にかけて、低い土地を耕作地とし、やや高い土地に建物を建てた農村集落が点々と存在し、その中には道後今市遺跡10次調査のように、数棟の建物があり、豊かな生活を想像させる集落もあります。15世紀には湯築城の近辺に一辺が一町（109 m）の大きさの堀で囲まれた区画（武士の居館など）が存在しますが、周辺のように大幅に変わることはありませんでした。

16世紀に湯築城の外堀が掘られると、それまで続いていたほかの集落は姿を消し、湯築城下町の可能性のある道後町遺跡が出現します。農村集落が姿を消した理由については、堀を掘ったことによる水利の変化も原因となったと考えられます。湯築城が拡張したことは、新たな城下町の形成だけでなく、近隣の農村にも大きな影響を与えるものでした。

今回、道後町遺跡で見つかった遺構・遺物は、16世紀前半の外堀掘削後に、城の西側が本格的に町として整えられたことを具体的に示した重要な発見といえます。

では、この町はいつまで続いたのでしょうか？道後町遺跡からは、明確に遺構に伴うかたちで、17世紀前半以降に下る資料は出土していません。城が廃城となり、松山城建設に伴って城下町も移転したと伝えられている通り、17世紀のはじめには町は衰退したものと考えられます。

### 平成15年度湯築城資料館企画展

### 「湯築城周辺の遺跡展～みえはじめた城下のすがた～」 開催中!

湯築城を取り巻く中世遺跡から、次第にみえてきた湯築城下のすがた。道後今市遺跡、岩崎遺跡のほか、近年発掘調査が行われ、湯築城下町の可能性が高まった道後町遺跡の調査成果を展示しています。

期 間 7月15日(火)～11月9日(日)

会 場 湯築城跡復元区域 武家屋敷2

開館時間 9:00～17:00

休 館 日 月曜日(休日の時は翌日)

入 館 料 無料

主 催 愛媛県教育委員会  
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター



# ●出土遺物 ミニギャラリー●●●●●●●●●●

## せんか 貨

中世に使われていたお金は、円形の銅銭で中央に四角い穴が空いています。表には「皇宋通宝」「元豊通宝」など、4文字の銭名が鋳出されています。当時、日本では公式にはお金の発行を行っていなかったため、主に中国から輸入されたこれらの銭貨が流通していました。14世紀に中国から日本に向かっていて韓国沖で沈没した貿易船からは、約28トンもの銭貨が発見されており、日本への銭貨の流入量の膨大さを物語っています。

下の表は、湯築城跡から出土した銭貨の一覧です。最も古い時期に作られたものは「開元通宝」で、唐の時代に初めて鋳造（621年）されたものです。江戸時代に日本で鋳造された「寛永通宝」も出土していますが、湯築城が機能していた時代の最新銭は「永楽通宝」で、これが最も多く出土しています。また、もうほとんど判読できない磨り減ったものもあります。

このように、どの時代に作られ、どのような文字が書かれていようと、丸い中に四角い穴があれば、それは1文というお金の単位として通用しました。そのため、贋金作りも盛んであったようで、当時の国際貿易港であった堺では、お金の鋳型が出土しており、実際には日本で鋳造された銭貨も出まわっていたと考えられます。

実際に多額のお金を使用するときは、約100枚を紐に通して一緡とし、それが10束集まれば一貫文となりました。約100枚といっても、99枚以下や100枚以上のこともあって、枚数については厳密ではありませんでした。

湯築城跡出土銭貨一覧

銭貨名	国・王朝	初鋳年	出土点数
開元通宝	唐	621	11
太平通宝	北宋	976	1
淳化元宝		990	1
至道元宝		995	1
咸平元宝		998	4
祥符通宝		1009	4
天禧通宝		1017	3
天聖元宝		1023	3
明道元宝		1032	1
皇宋通宝		1038	17
至和元宝		1054	2
嘉祐元宝		1056	4
治平元宝		1064	2
治平通宝		1064	1
熙寧元宝		1068	7
元豊通宝		1078	10
元祐通宝	1086	4	
紹聖元宝	1094	4	
元符通宝	1098	1	
聖宋元宝	1101	2	
大観通宝	1107	4	
政和通宝	1111	4	
宣和通宝	1119	1	
正隆元宝	金	1157	1
正洪通宝		1368	2
永楽通宝		1408	44
小計			139
嘉慶通宝	清	1769	1
道光通宝		1821	1
寛永通宝	日本	1636	11
寛永不明		*****	37
合計			189



出土銭貨で一番古い  
「開元通宝」




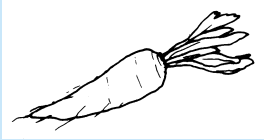

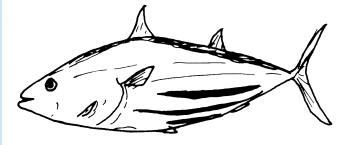






出土銭貨で一番多い  
「永楽通宝」

## ●中世を知ろう!

### 中世の物価

中世の物価はどのようなものだったのでしょうか。16世紀の湯築城でも使われていた輸入陶磁器、備前焼、中国産天目茶碗などの焼物の価値を、銭貨に置き換えて比較してみましょう。

文献資料をもとに小野正敏氏が作成した「奈良・京都を中心とした15・16世紀の物価比較」を参考にならべてみました。素焼きの土器かわらけ1枚が銭貨1枚1文で、大根一把と同じくらいです。当時のブランド品である備前焼のすり鉢が30文、茶壺が450文するといわれます。輸入陶磁器では、酢皿（染付皿）が1枚35文で、大工が1日働いた賃金で酢皿3枚買える計算になりそれほど高いものではなかったようです。日常生活用具は手ごろな値で手に入りやすかった一方で、茶の湯に使われる道具については、中国製の天目茶碗は8000文、茶の湯釜は2000文で、大工が80日働いてやっと中国産の天目茶碗が買えるほどの大変高価なものでした。一般の集落で天目茶碗が出土することは少ないことから、当時、茶の湯道具一式を手に入れ、使うことのできた人々は限られていたことがわかります。

1文 かわらけ 1枚		1.6文 大根 (一把)	
30文 備前焼すり鉢		36文 鯉	
35文 酢皿 (染付皿)		100文 大工手間日当 (大工の1日の賃金)	
100文 火鉢		100文 鍛冶手間日当 (鍛冶や 〳)	
450文 備前焼茶壺		100文 壁塗手間日当 (壁塗り 〳)	
	土師質土器火鉢	2000文 茶の湯釜	
		8000文 建蓋 (台付) (中国の天目茶碗)	
			
			参考：瀬戸美濃産 



当時の首都圏<sup>けん</sup>にあたる京都・奈良と地方では、物価も異なるといわれています。それでは、湯築城周辺の道後の物価は、他の地とくらべてどうだったのでしょうか。

16世紀後半ごろの道後の物価について、宣教師のルイス・フロイスが記した『日本史』では、次のように触れられています。道後には、「伊予国のもっとも主要な市」があり、「土地はそれ自体肥沃<sup>ひよく</sup>であって多数のものを算（産）出し、（物価が）ごく安く、日本中で（も）もっとも（物が）安い土地の一つである」とされており、道後はとくに物価が安いことが記されています。どこに「道後の市」があったのはわかりませんが、湯築城周辺には、物が安く豊富に集まる市があり、さまざまな経済活動が行われていたことがわかります。

注) 左ページ写真は湯築城跡出土遺物です。当時の京都・奈良での物価と照らし合わせた場合の参考資料で、そのものの値とわかっているものではありません。

#### 参考文献

小野正敏編『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会 2001

小野正敏『戦国城下町の考古学』講談社 1997

国立歴史民俗博物館編『お金の不思議―貨幣の歴史学―』山川出版社 1998

川岡勉 『増補 河野氏の歴史と道後湯築城』青葉図書 1998

## イベント紹介コーナー

### 親子で学べる湯築城講座 「つくってみよう!! 湯築城」

7月19日（土）、20日（日）、26日（土）、27日（日）の4日間、上記講座を開催し、計44組の小学5・6年生親子の参加がありました。

全2日間の日程で、1日目は、等高線ごとに形を切り取ったダンボールを重ね合わせて土台作り。そして、その上に粘土をはりつけて丘陵部と土塁をつくり、二重の堀と土塁を備えた湯築城のかたちを学びました。2日目には、丘陵部のくるわや道を実際に歩



いて観察し、模型に描き込んだあと、中世の城の防御<sup>ぼうぎょ</sup>の方法や特徴について学びました。最後に武家屋敷や門を取り付け、旗を立てて、湯築城の立体模型を完成させました。今回は、お父さんお母さんも一緒になって模型づくりに挑戦していたようで、「湯築城については初めて知り勉強になった」、「夏休みに親子で一緒に<sup>いっしょ</sup>過ごし、模型づくりを通して共同作業ができてよか



### 英語版パンフレット 作りました

英語版のパンフレットを作成し、配布を始めました。湯築城資料館のほか、愛媛県国際交流センターにも置いてありますので、ご利用ください。

## ●ボランティアガイドの声

道後公園（湯築城跡）ボランティアガイド協議会発足にあたって

湯築城跡ボランティアガイドとしての私たちの活動は、平成14年4月に始まりました。その活動の中で、さらにお互いの親睦を<sup>しんぼく</sup>図るとともにより質の高いガイドサービスを提供すべく、平成15年4月、本協議会（構成員53名）を発足させました。

研修会・イベント開催などを通し、国史跡となった道後公園（湯築城跡）と中世の歴史文化の<sup>みりよく</sup>魅力を広く発信できるよう努力し、この活動が私たちにとってかけがえのない生涯学習の場となるよう力をあわせていきたいと思ひます。（代表 田村七重）



## ●湯築城の自然ひとコマ●

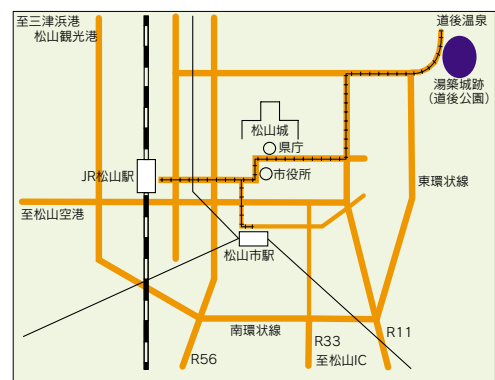
公園西口から丘陵に登りきる直前に、杉の木が2本並んでいます。

丘陵広場となっている平坦地（くるわ）には、かつて「二本杉」があったことが、湯築城の姿を伝える『湯築古城之図』<sup>ゆづきこじょうのず</sup>（江戸時代）に描かれています。それにちなんで、このくるわは「杉ノ壇」と呼ばれていました。今はうっそうと木々が生い茂っている丘陵ですが、湯築城が機能していたころには防衛上の理由からほかの木は無く、すくくとそびえる二本杉はさぞや目立ったことでしょう。

現在の二本杉は外来種のヒマラヤ杉で、それほど古いものではありませんが、二本仲良く並んでこれからの湯築城跡を見守っていくことでしょう。

### <<利用案内>>

- 公園  
常時開園（24時間OPEN）入園料無料
- 展示施設  
入館料無料  
9時～17時  
休館日/毎週月曜日（休日の時は翌日）12月29日～1月3日



### ■編集後記■

湯築城跡では、毎日セミが<sup>がっしょう</sup>大合唱、夏真っ盛りです。

今年度は、初めての企画展「湯築城周辺の遺跡展～みえはじめた城下のすがた～」に取り組みました。すべて手作りの小さな展示ですが、おかげをもちまして好評です。是非、お立ち寄り下さい。（S）

### 湯築城だより 3号

編集・発行 湯築城資料館

〒790-0857

愛媛県松山市道後公園

TEL 089-941-1480

FAX 089-941-1481